

# 研究最前線

THE FRONT LINE OF RESEARCH

商学部

## 日本と中国の近現代経済思想

### PROFILE

三田 剛史 MITA Takeshi

商学部教授  
専門：経済思想史

- 1971年 大阪府生まれ
- 2003年 日本学術振興会特別研究員・北京大学研究学者
- 2005年 博士(経済学)
- 2006年 外務省専門調査員(在上海日本国総領事館)
- 2010年 外務省国際情報統括官組織専門分析員
- 2010年 成蹊大学経済学部非常勤講師
- 2011年 武蔵野大学・二松學舎大学非常勤講師
- 2013年 明治大学商学部専任講師
- 2019年 明治大学在外研究員(エディンバラ大学)
- 2023年から現職

#### 主な著書・論文

『甦る河上肇—近代中国の知の源泉—』(藤原書店、2003年)、研究ノート「岩倉遣米欧使節団のエディンバラ—150年後の再訪—」(『CALEDONIA』第49号、2021年)、「帰国前後の朱紹文」(『中国研究論叢』第21号、2021年)、「雑誌『経済研究』における「過渡期」と「経済法則」をめぐる論争」(『中国研究論叢』第22号、2023年)

#### 所属学会

社会経済史学会、日本経済思想史学会、比較文明学会

私は修士課程進学以来、経済思想史の分野で研究を行ってきた。大学院で研究テーマに選んだのが河上肇である。河上肇(一八七九〜一九四六年)は、現在の山口県岩国市に生まれ、山口高等学校を卒業後一八九八年に東京帝国大学法科大学に進学し、新聞記者などを経て京都帝国大学で一九二八年

まで約二〇年にわたって教鞭を執った経済学者である。河上は、第一次世界大戦中の英国留学によって先進国における貧困の存在に着目し一九一七年に『貧乏物語』を刊行すると、資本主義に対する批判の潮流を人道主義と社会主義に見出したが、ロシア革命という世界史的イベントも背景にあり、マル

クス主義の研究に進んでいった。河上は日本における先駆的なマルクス経済学者となったが、その影響は中国にまで及んでいた。一海知義の先行研究により河上の中国への影響力の大きさを知ると、博士課程で河上の中国への影響を研究テーマに選び、その後、現在に至るまで近現代の日本と中国の経

済思想、そしてその交流史が私の主たる関心分野となった。日清戦争以後、中国から日本へという文明の流れは逆転し、中国が日本に近代化を学ぶという動きが始まったが、河上の学問の中国への影響もその流れの中にある。中国における初期の社会主義・マルクス主義研究や共産主義運動は、

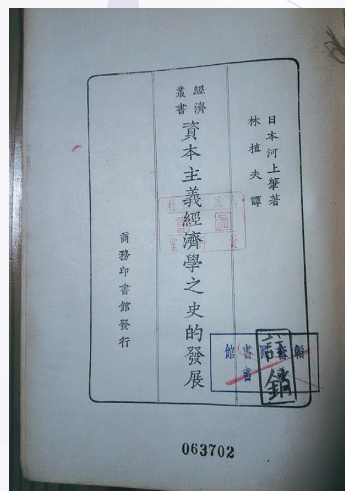
その担い手に日本留学経験者が多く、日本からの思想的、理論的影響なしには成り立たなかったといっても過言ではない。李大釗、毛沢東、周恩来ら中国のマルクス主義や中国共産党の発展と中華人民共和国の成立に大きな役割を果たした革命家、知識人の多くが、河上の著作に学んでいた。中国古典に由来する伝統思想を基盤にして、近代西洋の経済学を学びながらラスキンやマルクスの資本主義批判を模索しつつ受容し、マルクスIIレーニン主義に活路を見いだすという河上の思想的営為は、同時代の中国で大いなる共感を得たと私は考えている。

下でマルクス経済学にも接したが、主にフリードリッヒ・リストの国民経済学を中国に応用することを考えていた。常に学的信念を貫こうとした朱紹文は、留学中には日本の憲兵隊の拷問を受け、帰国後は上海で国民党に囚われ、中華人民共和国成立後には共産党によって長らく弾圧された。後に朱紹文は、中西用論すなわち中国の伝統を基礎に西洋の知識や技術を取り入れる

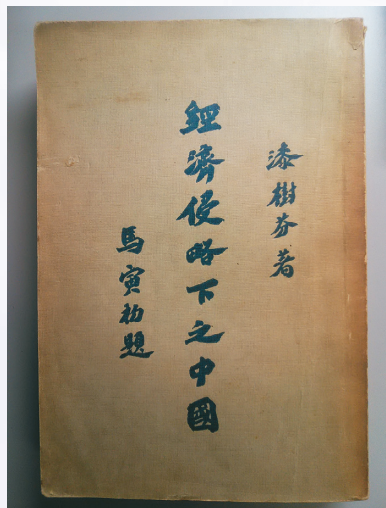
という考え方を批判し、人類普遍の学問を追究することを主張した。『あのころの日本』(日本橋報社、二〇〇三年、三〇一〜三二頁)石川禎浩は「一九世紀後半からの社会主義革命運動とは、革命を行う以前にあらかじめ研究され、その研究に基づいてプログラムが策定され、それに依拠して発動されたものである」(『中国共産党成立史』岩波書店、二〇〇一年、二二頁)と論じた。一九五〇年代

の中華人民共和国において、社会主義化に関する経済政策論争には、マルクス経済学を基軸としない経済学者も参画していた。だが中華人民共和国において一九五〇年代後半には、研究に基づく「プログラム」が政治に取って替わられたといえる。二〇世紀前半に日本など当時の先進国から近代的思想・学問を学んだ中国の知識人の思潮は、そもそも多様なものだったはずである。「中体西用」という中国の限界を超越しようとした知識人や、マルクスIIレーニン主義以外の観点から中国経済を見ていた経済学者に今後は着目したい。

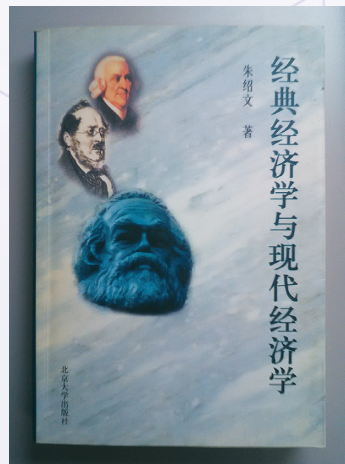
日中戦争下に東京帝国大学に留学して大学院まで進み、大河内一男の下で経済学を学んだ朱紹文(一九一五〜二〇一一年)は、当時の日本の思想統制の水面



河上肇の著作の中国語訳(1928年刊)



河上肇の教え子漆樹芬の著作(1925年刊)



朱紹文の著作(2000年刊)